

雪下殿空然は奥州へ下った。一旦は武州へ戻ったものの頼るべきものもなく、やがて下野へと流れて

「宗濟」

と改名する。少なくともこの時点で、彼は還俗はしていない。この宗濟に対する招致運動を、真里谷信勝は継続していた。そのしつこさに辟易しながらも、次第に己の内に膨らんできた野心を隠せなくなっていることを、宗濟も気付いていた。

さて。

永正九年（一五二二）六月一七日、上杉家に異変が生じた。武蔵鉢形城にあって関東管領後継者と目された上杉四郎顕実が、突如追放されたのである。これはもう一方の勢力・上杉五郎憲房による、家臣掌握による政変といえよう。

古河公方家から養子入りした上杉顕実の失脚は、実の兄である足利政氏にとっても手痛い。

そして上杉憲房は、足利高基哥りの人物である。

その翌日、築田政助は政氏に進言した。

「下野の味方を確たるものとし、我らの権威を保持することこそ肝要なり」

まずは祇園城の小山小四郎成長のもとで檄を発することが良策であると、政助は進言した。

政氏もそれに同意し、秘密裏に古河城を出て祇園城へ走った。

しかし古河城兵は、知らぬ間に、高基側へとゆるやかな調略がなされていた。そして政氏の留守中、家臣団の手引きにより、高基は古河に入城し占拠してしまっただのである。

「高基不孝の処、関東の諸士同心に不義を企て候条、是非に及ばざる次第」

このとき祇園城から檄を飛ばしていた政氏は、留守中、古河城が奪い取られたことを知り愕然となった。戦わずして城を取られたと云うことは、人心がすでに己から離れていたことを如実に意味していた。

以後、古河公方・足利政氏は祇園城に匿われて生き延びていくこととなる。

高基派の台頭は、これを機に諸豪族を従わせ

ていった。

しかし里見義通は、この時点で、未だ政氏派の姿勢を崩そうとはしていなかった。

この事件ののち

「左兵衛督（高基）公に附くことが情勢を誤らぬ最善の沙汰なり」

義豊が斯様に宣言した。

その宣言の背景には、原氏との共闘の密使を差し向けた事実がある。

義通は愕然となった。

真里谷信勝と盟約を結んでいる里見氏として、これは軽率甚だしい。

隠居とは申せ、義通は里見の采配を掌握する者である。

「なにゆえ原と結ぶ所存か？」

これを質す義通に、義豊は顔色一つ変えようとしなかった。

「左兵衛督（高基）公を立てる原家にこそ、義がござろう」

「古河公方は未だ左馬頭（政氏）殿である。この城を奪うことは不義である」

「人心は左兵衛督公の（一統）を望んで候や」

義通は目を剥いた。本音がちらりと出たことに、義豊への苛立ちを露わにした。

それに意を介すことなく、義豊は更に言葉を継いだ。

「原の家には都から連歌師が招かれます」

「だから？」

「そのような者とは、弓矢の外に文化の誼を通じたき由」

このことは、独断であり、専横である。

しかし、義豊を諫める取り巻きはいなかった。

更にこの年の八月二一日、里見義豊は高野山舜教院と宿坊契約を取り交わした。これは当主としての裁量を実施したことを意味する。

高野山一心院之内舜教院且那之儀

草範承候間、名判進候、

於向後三房州之衆一人不可有余儀候、

為後日之状、如右、恐々、

永正九年<sup>皇</sup>八月廿一日 源義豊

舜教院 園中

(里見家永正元龜中書札留抜書)

このことに、義通はじつと思索した。

当主としての裁量はいい。しかし、独断は言語道断である。

里見家は〈二統〉の衆ではない。ちよつとしたことから綻びが生じる。

「大殿あつての里見家なれば、ここはひとつ」

正木通綱は一計を案じ、具申した。

隠居である義通の意向をよくよく承知している者たちを選び、合議制を以て是非を図る。この決定を義通が領内に触れれば、よもや義豊も好きが適わぬこととなる。

つまりはこうだ。

義通は正式に隠居を宣言するが、家督継承者である義豊の脇には〈奉行衆〉を置き、独断を許すことなく政務を執行する。その奉行衆の筆頭には、在地の衆に目利きが適い判断に聡い里見実堯を据える。そうすることで、義豊に寄る者たちを独断の場から遠ざけるといのである。

「何事もよきにはからえ」

義通は大きく息を吐いた。

それが自然なまとも方であった。今更義通が隠居を取り下げることなど、代替わりの障りにしかならぬ。

ただし、正木通綱からの申しようは、義豊にとつて、

「無礼千万」

と憤慨させるものであった。

「その申し様は、殿に失礼でござらう」

義豊擁護派の家臣団は正木通綱に矚り寄った。さもあろう、義通の代で見ることがない陽の目を望む彼らにとつても、その門を閉ざされることは許し難い。

「ああ、いいよ。父上よりも儂が長く生きればいいのだ」

「殿……」

「冗談だ」

義豊は評定も変えずに、正木通綱の言葉に頷いた。義豊擁護派も頷いた。何よりも冗談と思えぬその一言が、彼らを納得させたのだ。意図的としたら、なんと自己であり臨機だらう。

「ただし」

義豊は義通の白浜城隠居を求め、稲村城の改修を正木通綱に語った。

十十十

小弓の嵐(1)

夢酔 藤山